

乳児の情動発達と父母の Emotional Availability の関連

— 遊び場面におけるやりとりの観察データからの分析 —

森山雅子²⁾ 小山里織³⁾ 安藤真斗⁴⁾ 宮地志保⁵⁾ 丸山笑里佳⁵⁾ 小林佐知子²⁾ 長谷川有香²⁾

問題と目的

わが国の父親たちは、それ以前の世代の父親たちよりもより多く子どもと関わるようになった(厚生労働省, 2008)。仕事と家庭のバランスを保ちながらの生活を望む父親は、非常に多い。また、子どもが生まれて、実際の育児に関わる父親たちも多くいる(厚生労働省, 2006)。父親たちが子どもと関わる意味やその影響についての関心は高い。しかしながら、父親に関する研究はまだ少なく、父親たちが育児に参加することと子どもの発達に関しての知見は多くはないといえる。

子どもの情動発達にとって、Emotional Availability(以下、EAとする)が重要であることが知られている。Emde& Sorce (1984)は、乳児と養育者の間には、生物学的に基礎づけられた報酬システムがあることを提唱している。このシステムは、相互作用的であり、乳児にも養育者にも報酬的であり・相補的であるとしている。また、Emde & Sorceは、この報酬システムを、Emotional availabilityとして考察している。Emde & Sorceによると、このシステムにおいて乳児は、情動信号を送ることを通じて母親に波長を合わせる。また母親も、情動信号を送ることを通じて乳児に波長を合わせる。乳児からみるとある幅の波長を表現することは、母親と関わるために重要であり、これは正の感情だけでなく負の感情も含んでいる。乳児のこの情動信号によって、養育者は、乳児自身が満足しているのかなどの現在の状態を見積もることが可能になる。そして柔軟で報酬的な養育者とは、応答的な、すなわち、乳児の情動的言語に十分反応する養育

者であり、しかも親の興味と楽しみの全体的な文脈の中で、個性のはっきりした活動を多彩に示す親であるとしている。Emde, Izard, Huebner, Sorce, & Kinnert (1985)はまた、乳幼児の情動の調節と共有は、養育者側の共感的応答性によって可能になるとしており、親の共感的応答性は、乳幼児の情動的共有や社会性の発達における快適で相互性のある肯定的な特性を促進するとしている。そして、養育者の鋭敏ですぐれた応答性の能力であるEAは、1歳の乳幼児に安定した愛着を引き出すとされている。EAについて、母親とその子どもについての研究はおこなわれており(Emde, et al., 1985; 金丸・武藤, 2004; 小原, 2005; 小山, 2008), EAが子どもの発達上重要であること、母親自身も変化することを示してきた。たとえば、小山(2008)では、母親のEAが子どもの愛着と関連し、子どもの自発的な遊びを促すことが示されている。

これらの研究から、乳児と母親の間では、初期のころから、EAが乳児と母親の間の情動的な調節を図るとともに、お互いの愛情を確認させるすべであることが示されている。乳児の情動発達においてEmotional Availabilityの存在が重要であるといえる。しかしながら、養育者の一人でもある父親のEAについては検討されていない。同じ親であり、重要な養育者の一人である父親については、これまで研究の対象とされてこなかった。そこで、本研究は、父親のEAについて乳児の情動発達における関連を検討する。

子どもの発達において父親が影響を与えることは、この30年近くの父親研究によって明らかになってきている(Yogman, 1989; Farver & Wimbari, 1995; Tomasello, Conti-Ramsden & Ewert, 1990)。父親の遊びと子どもの愛着の関係(Yogman, 1989)、父親の態度と子どもの道徳性(Farver & Wimbari, 1995)、父親の関わりと子どもの認知発達(Tomasello, et al., 1990)など、父親の子どもへの働きかけが、子どもの発達に影響や促進を及ぼすことが示されてきた。これまでの父親研究は、子どもが2~3歳の時期を対象にしており、その時期の父親の

- 1) 本研究の一部は、日本発達心理学会第19回大会において発表された。
- 2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究生
- 3) 県立広島大学保健福祉学部助教
- 4) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程(前期)
- 5) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科(後期)

かわわりと、その時期の子どもの発達に焦点が当てられている。

もっとも幼い乳児を対象とした研究では、7~8か月の乳児において、父親と母親双方に対して、愛着行動や親和行動を表出していることが示されている(Lamb,1978)。7~8か月の時点で子どもたちは、父親・母親それぞれに異なった態度を表していることが示されている。母親に対しては、甘えを示すような態度を示し、父親に対しては、興奮を示した。この子どもの態度の違いは、7~8ヶ月の間での相互作用の結果から生まれると考えるとすると、父親が母親とは異なる何らかの影響を及ぼしていることが考えられる。しかしながら、生まれてから初めの頃の父母の子どもとの相互作用を検討した研究は見られない。そこで、本研究では、乳児期の初めのころに焦点を当てて検討を行う。

Bringen, Robinson, & Emde(1998)は、EAの概念をその特性を測る方法とともに明らかにしている。母親のEAの測定については、IFEEL Picturesなどが知られている(Emde, Osofsky, & Butterfield,1993)。EmdeらのIFEEL Picturesをもとに、井上・濱田・深津・滝口・小此木(1990)は、日本版IFEEL Picturesを開発した。日本版IFEEL Picturesでは、12か月児の30枚の写真から、母親がその写真から読み取るさまざまな情報について尋ね、それに基づき、母親のEAが測定される。本研究の対象者は、6か月未満の子どもの養育者であるため、IFEEL Picturesは用いないこととした。

そこで、本研究では、Bringen, et al. (1998)の観察によるEAの測定を使用する。この尺度の特徴は、具体的な行動よりも行動スタイルを強調する点であり、包括的で親が反動的であることだけに重点を置いていない点である。また、親子の遊び場面を測定することによって、EAを測定することができる。よって本研究では自然な遊び場面を設定し観察することとした。

この方法では、養育者のEAは「sensitivity (感受性)」、 「structuring (構造化)」「Intrusiveness (押し付けがましくない)」、 「nonhostility (敵意のなさ)」の4尺度から構成されており、子どものEAを「Responsive to parent (親への反応性)」、 「Involvement to parent (親の関与)」の2下位尺度から構成されていた。また、Bringen, et al. (1998)では、乳幼児を対象としたEAに関する測定基準を作成している。その中でEAの項目として、Sensitivity, Structuring, Intrusiveness, nonhostility, Responsive to childを取り上げている。Involvement to parentがないのは、幼い乳児は、親へ積極的に歩み寄り関与する身体的能力がないためである。

本研究では、父親の関わりと子どもの発達の間を関連

するためにEAを取り上げるとともに、父子間のEAについても検討を行う。母子間だけでなく、父子間でEAが影響し合うことは、子どもの情動発達にとってより有効であると考えられる。

そこで、本研究は、日常的な遊びの場面を通して、6か月までの乳児における情動発達に父母のEAがどのように関連するか横断的に検討する。

方法

対象家族：生後1ヵ月から生後5ヵ月までの乳児とその両親7組。詳細はTable 1に示す。

対象児はすべて第一子であり、男児1名、女児6名であった。対象児とその父母については、それぞれの平均年齢は父親29.4歳 (SD:3.4, range:23-33)、母親28.9歳 (SD:3.4, range:23-33)であった。対象児の月例は、2か月~5か月であった。

調査時期：2007年2月~10月。

手続き：「パパママ子育て研究」として、知人の紹介もしくは、産院にて2~6ヶ月の子どもの第一子を持つ家族がリクルートされた。リクルートされた家族は、本研究に参加する上での研究の意義やプライバシーの配慮などを説明された。同意を得た家族を対象家族とした。研究の同意を得た対象家族に、撮影における注意事項を記したマニュアルと質問紙、記憶媒体 (DVDもしくはデジタルビデオテープ) が郵送された。撮影終了後、記憶媒体、質問紙を郵送にて回収した。ビデオカメラのない家庭にはビデオカメラを貸出した。

Table 1 EAの各カテゴリーとその内容

カテゴリー	内容
sensitivity	肯定的で乳児の感情や生理的な状態を制御するのを助けている程度 乳児の合図の微妙な差異 (ニュアンス) を読み、正確で相応しい反応をしている程度 子どもの発達的な興味や能力の理解を反映している程度
structuring	親が子どもの遊びを構造化するか、子どもの働きかけに親が続くか、制限を与えるかの程度
nonintrusiveness	子どもとのやり取りで、指示的だったり、刺激を加えすぎたり、圧倒している程度
nonhostility	子どもに対する親の敵意・イライラ感の程度
Responsiveness to parents	両親との相互作用による明白な喜びの程度

観察：各家庭にて、父と子、母と子それぞれが遊んでいる場面が3分間撮影された。撮影は、遊んでいない一方の親か、もしくは三脚を用いておこなわれた。対象児及び親の表情がとらえられるように行われた。

撮影が対象家族のみで行われたのは、普段の家庭の雰囲気の中で自然な場面の遊びを撮影しなかったためである。

質問紙：父母の年齢、職業状態、分娩の様子、家事分担についてたずねた。

EAの評定：父母それぞれの遊び場면을 Emotional availability Scale (Biringen, Robinson, & Emde, 1998) に基づいて、父親、母親、子どもそれぞれについて評定した。

EAの定義については、Table 2に示す。父親と母親のEAについては、sensitivity, structuring, nonintrusiveness, nonhostilityの4尺度を評定し、子どものEAについてはresponsiveness to parentが評定された。それぞれの得点範囲は、Sensitivity：1～9点、Structuring：1～5点、Nonintrusiveness：1～5点、Nonhostility：1～5点、Responsiveness to parent：1～7点であった。この尺度の特徴は、具体的な行動よりも行動スタイルを強調する

点であり、包括的で親が反動的であることだけに重点を置いていない点である。概念の要素は、ポジティブな感情、明確な理解と適切な反応、親子のやり取りの間のタイミングの気づき、注意と行動における柔軟性、親子間の遊びの多様性と創造性、子どもの受け取り方、相互作用の量と子どもにとって親が利用可能であること、葛藤状況における解決方法である。これらについて総合的に判断し、評定を行った。

心理学を専攻する大学院生4名で、EAのトレーニングを行った。その後、第1著者筆名以外の大学院生2名で本研究における遊び場面での評定を行った。ランダムに選択した2つのケースについて3分間の遊び場面を見終わった後に、それぞれの場面について5つの評定を行った。それぞれの一致率は、父親の行動カテゴリーで $\kappa = .63$ 、母親の行動カテゴリーで $\kappa = .70$ 、子どもの行動カテゴリーは、 $\kappa = .74$ とおおむね満足できる一致率を得た。

結果

父親と母親それぞれにおける EA の比較

Table 3に父親と母親のEA値及び父親と母親に対する

Table 2 対象家族のプロフィール

ID	father			mother			child	
	age	job	experience	age	job	experience	birth	sex
1	30	フルタイム就労	なし	33	無職	なし	2ヶ月	女兒
2	31	フルタイム就労	なし	30	無職	なし	4ヶ月	女兒
3	33	フルタイム就労	なし	27	無職	なし	5ヶ月	女兒
4	23	フルタイム就労	なし	23	無職	あり	2ヶ月	男児
5	27	フルタイム就労	なし	27	育児休暇中	なし	2ヶ月	女兒
6	32	フルタイム就労	あり	32	育児休暇中	あり	2ヶ月	女兒
7	30	フルタイム就労	あり	30	無職	あり	2ヶ月	女兒

Table 3 父母の EA 得点の平均値

		father	mother	t-value	
Sensitivity	M	5.50	7.75	-1.71	n.s
	(SD)	(1.91)	(1.50)		
Structuring	M	3.50	4.25	-3.00 [†]	
	(SD)	(0.58)	(0.50)		
Nonintrusiveness	M	3.25	4.25	-1.41	n.s
	(SD)	(1.50)	(0.50)		
Nonhostility	M	4.50	4.75	-1.00	n.s
	(SD)	(0.58)	(0.50)		
Responsiveness	M	5.00	6.25	-1.99	n.s
	(SD)	(1.15)	(0.96)		

[†] p < .10, * p < .05, ** p < .01

子どものresponsivenessの平均値と標準偏差を示した。対応のあるt検定の結果, structuringにおいて, 父親と母親の平均値の差が有意傾向であり ($t(3)=-3.00, .05 < p < .10$), 母親の方が父親よりも structuringが高い傾向にあることが示された。他の指標における有意な差はみられなかった。

父子間と母子間の EA

父親と母親のEAと子どものEAの関連を Figure 1, Figure 2に示した。父親, 母親ともに structuringと子どものEAとの間に有意な正相関が認められた (父親: $r=.95, p < .01$; 母親: $r=.85, p < .05$)。母親については sensitivityと子どものEAとの間に正相関が有意傾向であった ($r=.69, .05 < p < .10$)。

子どもの月齢と父母のEAの関連

上記の結果をふまえ, 父母のEAの中の sensitivity, structuring, 子どものresponsiveness to parentについて検討した。子どもの月齢ごとに, EAの値をプロットし

た (Figure 3, 4)。その結果, 母親の sensitivityと子どもの月齢の間に正の相関が示された ($r=.92, p < .05$)。他の尺度は, 子どもの月齢との関連はみられなかった。

考察

本研究では, 父母のEAと子どもの情動発達について2ヶ月から5ヶ月までの乳児の家族を対象に横断的な検討をおこなった。

父母のEAを測定したところ, 母親の方が父親よりも structuringが高かった。つまり遊びを子どもに合わせて構成していくことは, 子どもが2~5か月児であっても母親の方が父親よりも高いことがわかった。父親は子どもと遊ぶ際に, 子どもに合わせるよりも, 自分から子どもに対して遊びを提案していく様子が見られた。

2~3歳児に対する研究では, 父親は子どもに刺激的で新規な遊びを提供する (Labrell, 1996 / 1997)。おもちゃ遊びの間, 父親はおもちゃを身体的接触の口実とし

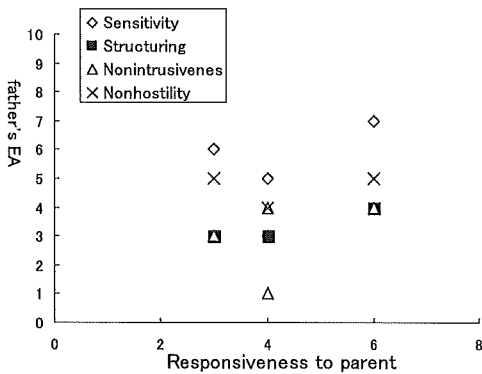


Figure1 父親のEAと子どもの反応性の関連

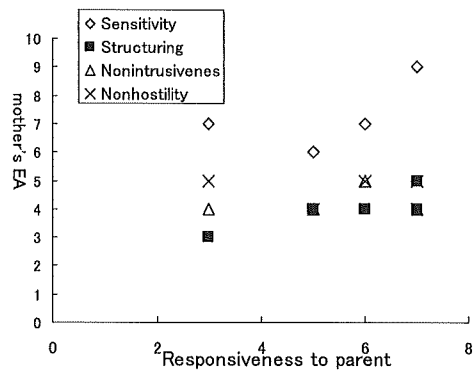


Figure2 母親のEAと子どもの反応性の関連

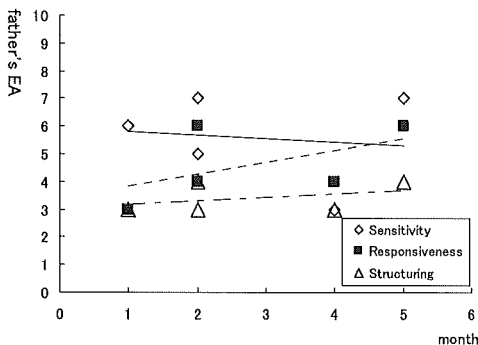


Figure3 父親のEAと子どもの月齢の関連

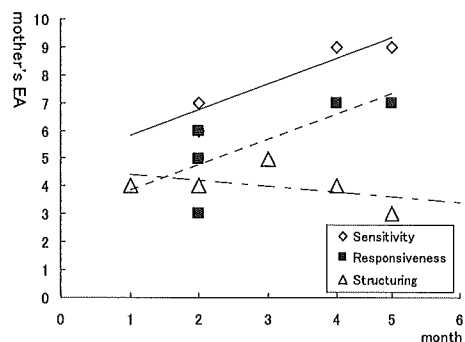


Figure4 母親のEAと子どもの月齢の関連

て使用し、母親よりも非慣習的な遊びを提案する（おもちゃを通常と違うパターンで使うなどの不適切な方法で用いる）。また父親は子どもを感情・認知的に不安定にさせるようなからかいをする。Laberell (1996) の指摘によれば、不規則性・規則性の両方が認知発達には重要で子どもは予想できないような出来事への対処を学ぶ事が必要であるとしている。Le Camus (1995) によればリスクを負うことを推奨することは安定性や安全を求めるのと同じくらい重要であり、父親は外の世界へ連れ出す役割を担っていると述べている。Yogman (1981) の6ヶ月の乳児と親の遊びに関する研究では、両親との遊びは異なる経験を与え、社会・認知スキルの選択的な獲得を促進する上で重要であると結論付けている。本研究でも、母親は、子どもに合わせた関わりをしているのに対し、父親は乳児の時期から、子どもの要求や興味にと合わせるのみではなく、親自身の楽しみを独自に伝える試みをしているような関わりを見せた。本研究での父親の遊び方は、先行研究と一致していた。本研究の結果は、2~3歳児に対しての父母のかかわりの違いが乳児期の早いうちからある可能性を示したものであるといえる。

Sensitivityなど他の下位尺度について、父母の間に差は見られなかった。とりわけ、子どもの情動を読み取るSensitivityは、父親母親ともに、ある程度の能力を持ち、子どもの情動のサインに敏感に反応していることがわかった。

また、子どもの月齢と母親のsensitivityの関連が見られたことから、母親は時間とともにsensitivityを増加させているといえよう。一方、父親のsensitivityは子どもの月齢と関連しなかった。母親のsensitivityが子どもの月齢と関連し、父親のsensitivityが関連しなかったということについては、2つの理由が考えられる。

1つは、父親は、sensitivityが発達しにくいという可能性である。Ainsworth (1990) は安全基地と遊び相手は両立しないとしている。また、Paquette (2004) は次のような指摘をしている。『子どもの発達には父母の補完性が重要なのである。2つのメカニズムが密接に関連しており、父子間の遊びは母子愛着に依存している（子どもの欲求が満たされていることにより遊びが成り立つから）。』これらの指摘から、安全基地という区分での遊び相手になる片方の親（おおむねわが国では、安全基地が母親、遊び相手が父親になることが多いと考えられるが）は、sensitivityを発達させにくいことが考えられる。

2つ目は、sensitivityは、関わる時間の量に従って発達する可能性である。本研究の対象家族は、母親が育児休業中もしくは主婦であり、ほとんど一日中子どもと関わっていると考えられる。また、母親たちの子どもと関

わった総時間は、それぞれの子どもの月齢と相関すると推測される。sensitivityとは、肯定的で乳児の感情や生理的な状態を制御するのを助けや、乳児の合図の微妙な差異（ニュアンス）を読みとり、正確で相応しい反応、子どもの発達の興味や能力の理解である。これらのさまざまな指標は、学習することが可能ではないだろうか。もし、sensitivityの高さが、学習によって成り立つならば、学習対象である子どもと接している時間によってsensitivityは発達すると考えられるだろう。これらの可能性について今後検討する必要があるといえる。

子どもの反応性についても父母で違いは見られず、5か月まででは乳児における父母それぞれへの反応が変わらないといえる。

最後に、子どもの反応性と、父母のEAを検討したところ、子どもの反応性に母親のEAだけでなく父親のEAも関連することが示された。つまり、子どもの情動発達における養育環境として、母親以外に父親のEAの存在があること、また、子どもの情動発達が父親の情動表出による可能性が示唆された。従来の研究では、母親の子どもの情動発達における役割が焦点化されてきたが、父親においても同様に子どもに対して情動発達を促す要因の1つであることが示されたといえる。

今後の課題

本研究は、乳児期の初めの段階における情動発達において父母のEAの関わりを横断的に検討したものである。しかしながら、今回の調査参加者が少なかつたため、統計的な処理の難しさや、個人差の影響などがあるいえる。今後はサンプルを増やし検討することが必要である。また、横断的な研究だけではなく、父母やその子どもが時系列的にどのような変化をするのか、縦断的な検討も必要であろう。

引用文献

- Ainsworth, M.D.S. (1990). Some considerations regarding attachment theory and assessment relevant to attachments beyond infancy. In M.T. Greenberg, D. Cicchetti, & E.M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years* (pp. 463-488). Chicago: University of Chicago Press.
- Bringen, Z. (2000). Emotional Availability: Conceptualization and research findings. *American Journal of Orthopsychiatry*, 70, 104-114.
- Biringen, Z., Robinson, & Emde, R.N. (1998). Emotional Availability Scale. Unpublished manuscript. University of Colorado Health Science Center.

- Farver, A.M., & Wimbarti, S. (1995). Paternal participation in toddlers' pretend play. *Social Development*, 4(1), 17-31.
- Emde, R.N. (2000). Next steps in emotional availability research. *Attachment & Human Development*, 2, 242-248.
- Emde, R.N., Osofsky, J.D., & Butterfield, P.M.(Eds.). (1993). *The IFEEEL Pictures: A new instrument for interpreting emotions*. Connecticut: International Universities Press, Inc.
- Emde, R.N. & Sorce, J.F. (1984). The rewards of infancy: Emotional availability and maternal recentering. In D.J.Call, R.T.Galenson, & R.L.Tyson(Eds.), *Frontiers of infant psychiatry*. New York: Basic Books.
- (Emde, R.N. & Sorce, J.F. (1988). 乳幼児からの報酬—情緒応答性と母親参照機能—小此木啓吾 (監訳) 乳幼児精神医学 岩崎学術出版社)
- Emde, R.N., Izard, C., Huebner, R., Sorce, J.F. & Kinnert, M. (1985). Adult judgements of infant emotions: Replication studies within and across laboratories. *Infant Behavior and Development*, 8, 79-88.
- Farver, A.M., & Wimbarti, S. (1995). Paternal participation in toddlers' pretend play. *Social Development*, 4(1), 17-31.
- 井上カーレン果子・濱田庸子・深津千賀子・滝口俊子・小此木啓吾 (1990). 乳児の写真から情緒を認知する能力の判定: Japanese IFEEEL Picture Test. *家族療法研究*, 7, 144-151.
- 金丸智美・無藤隆 (2004). 母子相互作用場面における2歳児の情動調整プロセスの個人差. *発達心理学研究*, 15, 183-194.
- 厚生労働省 (編) (2002). *厚生白書*
- 厚生労働省 (2008). *今後の仕事と家庭の両立支援に関する研究会報告書*.
- 小山里織 (2008). マターナル・アタッチメントと母親の養育行動および1歳児のアタッチメント行動との関連——積木課題場面における母親の教授行動の観察研究を中心に. *小児保健研究*, 67, 565~572.
- Labrell, F. (1996). Paternal play with toddlers: Recreation and creation. *European Journal of Psychology of Education*, 11, 43-54.
- Labrell, F. (1997). L'apport spécifique du père au développement cognitif du jeune enfant. *Enfance*, 3, 361-369
- Lamb, M.E. (1996). *The role of the father in child development* (Ed. 3.) New York: Wiley.
- Le Camus, J. (1995). Le dialogue phasique: Nouvelles perspectives dans l'étude des interactions pèrebébé. *Neuropsychiatrie de l'Enfance*, 43, 53-65.
- 小原倫子 (2005) 母親の情動共感性および情緒応答性と育児困難感との関連 *発達心理学研究*, 16, 92-102.
- Paquette, D. (2004). Theorizing the Father-Child Relationship: Mechanisms and Developmental Outcomes. *Human Development*, 47, 193-213.
- Tomasello, M., Conti-Ramsden, G. & Ewert, B. (1990). Young children's conversations with their mothers and fathers: Differences in breakdown and repair. *Journal of Child Language*, 17, 115-130.
- Yogman, M.W. (1982). Development of the father-infant relationship. In H. Fitzgerald, B. Lester, & M.W. Yogman (Eds.), *Theory and research in behavioral pediatrics* (pp. 221-229). New York: Plenum Press.
- Yogman, M.W. (1994). Observations on the father-infant relationship. In S.H. Cath, A.R. Gurwitt, & J.M. Ross, *Father and child: Developmental and clinical perspectives* (pp. 101-122). Hillsdale: The Analytic Press.

(2008年11月5日受稿)

謝辞

育児のもっとも忙しい中、ビデオで日常生活を撮影いただいた調査参加家族の皆様には厚くお礼申し上げます。

ABSTRACT

Relationship between the Infant's Emotional Development and
the Emotional Availability of Parents
~Analysis of observation of data in the play situation~

Masako MORIYAMA, Saori KOYAMA, Masato ANDO, Shiho MIYAJI, Erika MARUYAMA,
Sachiko KOBAYASHI, Yuka HASEGAWA

The purpose of this study was to examine the relationship between the emotional development of young infants and the emotional availability of their parents. Seven families, consisting of father, mother and the first child less than 5 months old, participated in a play situation. The Emotional Availability of parents and the emotional response of infants were rated using the Emotional Availability Scale. The results showed that; (a) the mothers' sensitivity was higher than the fathers' sensitivity; (b) that there was a relationship between the parents' Emotional Availability and the emotional response of infants; (c) with increasing age of the infants, the mothers' sensitivity increased. The findings suggest that not only the mothers' but also the fathers' emotional availability resulted in an enhanced emotional response on the part of the infants.

Key words: Emotional availability, infant, emotional development, fatherhood